

その他（自由選択科目）：教育実践特別講義

担当教員：隅田学，池野修，駕原進，熊谷隆至，菅谷成子（法文学部），藤田昌子，荻田知則，杉林英彦，高橋治郎，富田英司，ボグダン・デイビッド，深田昭三，向平和，吉村直道，ルース・バージン（国際連携推進機構）

フィリピンでの教育実践体験で学生が得たもの（４）

理科教育講座・隅田学

授業の目的

本授業は、「フィリピン大学（学術交流協定締結校）と連携協力しながら、英語を教授言語として授業を計画・準備し、現地渡航して授業実践を行い、教育分野における国際的な感覚を培う」ことを目的としている。

具体的な到達目標は、以下の３つである。

- (1) 幼稚園・小学校・中学校・高等学校等の各教科等から、任意の学年段階・内容を選び、フィリピンの教育制度や文化を踏まえながら、授業資料を英語で独自に開発することができる。
- (2) 開発した教材や資料等を利用し、英語を教授言語として、フィリピンの子どもたちに授業を行うことができる。
- (3) フィリピンの学校視察や文化交流を通して、国際的な教育活動への関心を高め、様々な文化・言語の人たちと経験や理解を共有することができる。

受講者数

本授業は、フィリピンでの教育実践体験への参加を受講の条件としている。受講者数（渡航者数）は２０名であった。学部構成と、各授業グループは表１のとおりであった。

表１ 受講者の学部構成とグループ

学部構成		
教育学部		17名
学校教育教員養成課程		14名
総合人間形成課程		2名
特別支援教育教員養成課程		1名
教育学研究科		2名
法文学部		1名
授業グループ		
小学校	社会科グループ	4名
	算数グループ	4名
	理科グループ	4名
中学校	理科グループ	4名
高等学校	家庭科グループ	4名

授業の概要

本授業は、大きく分けて次の３つの要素から成り立っていた。

(1) 日本での授業準備

渡航前の７月から１月上旬まで、各授業グループに分かれて、担当教員の指導を受けながら授業の指導案作りや、教材作りを行った。11月には、フィリピン大学教育学部のグレッグ・パウイレン先生を愛媛大学に招聘し、事前指導と全体講義を行った。グレッグ先生には、学生が作成した指導案についても、個別に丁寧な指導していただいた。

(2) フィリピンでの教育実践体験

フィリピンに渡航し、現地で授業実践をすることに加えて、フィリピン大附属学校以外の現地校の見学や、様々な文化体験なども行った。この教育実践体験の詳細については、次節で報告する。

(3) 成果報告会

２月下旬にフィリピン大学のアメリカ・ファハルド先生、JASSOの秋保聡氏を交えて学生グループによる授業実践の成果報告会を行った。学生が授業実践の成果発表を行うと共に、アメリカ先生からは、フィリピン大学附属学校の先生方からの評価結果を報告していただいた。

フィリピンでの教育実践体験

フィリピンでの教育実践体験は、大きく分けて次の３つの要素から成り立っていた。

(1) 現地校の見学

公立小学校である Kamuning Elementary School と、私立学校の Berea Science & Arts High School, Harris Memorial College を訪問、見学した。



(2) 授業実践

小学校社会科，小学校算数，小学校理科，中学校理科，高等学校家庭科の各グループが，防災教育（小学4年），重心とコマ（小学4年），身近な酸・アルカリと指示薬（小学5年），プラスチックの性質と再利用（中学1年），衣服と文化（高校4年）をテーマについて，フィリピン大学附属学校（UPIS）にて授業実践を行った。授業実践に先立って授業観察と現地校の授業担当教員との事前打ち合わせを行うと共に，授業実践後には，授業担当教員と授業を振り返りながら研究協議を行った。



(3) 文化体験

マニラ近郊のコレヒドール島やアンティポロ教会を訪問・見学した。そのほか，ショッピング，歓迎パーティ，お別れパーティ等を通して，異文化体験をすることが



できた。

学生による成果評価

自分が身につけたさまざまな能力についての評定を，説明会，渡航直前，渡航後の3回評定を求め，その結果を表2に示す。

1)フィリピンの子どもたちにふさわしい教材をつくることできる，2)フィリピンの子どもたちによくわかるように説明することできる，4)英語で説明をしたり会話をしたりすることできる，7)日本の文化や習慣をフィリピンの子どもたちに紹介できる，の項目については，説明会時から渡航直前，渡航直後といずれの段階でも上昇する傾向があった。

3)様々な人と協同してより質の高い授業を行うことできる，5)英語で電子メールや手紙を書くことできる，8)日本を世界的な視野に位置づけて考えることできる，9)世界のさまざまな人々と交流することできる，10)世界のさまざまな国で，自分を役立てることができ，の項目については，現地渡航を経験して，評定が大きく上昇する傾向があった。

6)フィリピン文化や習慣を日本の子どもたちに説明できる，の項目については，説明会時から渡航直前にかけて評定値が上昇するが，渡航を経験することによってさらに大きく上昇した。

表2. 本プログラムに関わる自己の能力評定

	説明会	渡航直前	渡航直後
1) フィリピンの子どもたちにふさわしい教材を作ることができる	2.65	3.30	3.70
2) フィリピンの子どもたちによくわかるように説明することできる	2.55	2.90	3.45
3) 様々な人と協同してより質の高い授業を行うことできる	3.80	3.95	4.45
4) 英語で説明をしたり会話をしたりすることできる	2.65	3.05	3.40
5) 英語で電子メールや手紙を書くことできる	2.90	3.05	3.45
6) フィリピン文化や習慣を日本の子どもたちに説明できる	2.15	2.60	3.90
7) 日本の文化や習慣をフィリピンの子どもたちに紹介できる	2.85	3.25	3.65
8) 日本を世界的な視野に位置づけて考えることできる	3.00	2.95	3.95
9) 世界のさまざまな人々と交流することできる	3.05	3.10	4.00
10) 世界のさまざまな国で，自分を役立てることができる	2.85	2.65	3.35

※ 「全くできない：1」から「十分にできる：5」の5段階評定。